福部村埋蔵文化財調査報告書第14集

TOTTORIKEN IWAMIGUN FUKUBESON
鳥取県岩美郡福部村

SONNAI I SEKI
村内遺跡発掘調査報告書

SUKUNAMI I SEKI
（直浪遺跡）

2001

福部村教育委員会

村内遺跡発掘調査報告書 二〇〇一 鳥取県岩美郡福部村教育委員会

序　　文

福部村は、狭い面積ながらも原始・古代の人々が力強く生活を営んだ痕跡が数多く残されており、近年の発掘調査から数多くの貴重な資料が報告されています。これらの報告では、県下でも数少ない縄文時代の遺跡から江戸時代に至るものまで詳細な報告がなされており、この時代から本村一帯が衣食住に恵まれた定住しやすい環境にあった事を窺わせています。

特に昭和62年から3年間の継続調査が行われた「栗谷遺跡」の発掘調査では、膨大な縄文土器などの出土遺物とともに縄文時代の加工技術の高さを窺わせる木製杓子が発見され、多くの出土品と共に重要文化財に指定されています。

この調査を契機に村内に所在する遺跡の重要性が再認識され、遺跡の保護と資料館の設置により沢山の人々にご覧いただく機会ができたことに感謝しています。

今回報告は、県内でも古くから知られ、重要な遺跡として認識されていた直浜遺跡の一部を調査したもので、新に遺跡の範囲、性格等が明らかになりました。

このような調査の積み重ねが、近年頻繁に行われている開発から埋蔵文化財を保護するための基礎となることについて意義深いものを感じています。

終わりに、今回の発掘調査事業を実施するにあたり、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位の多大なるご指導、ご協力に対し深甚なる感謝を捧げるとともに、発掘調査地の地権者と調査に従事していただいた皆様に対し厚く御礼申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成13年3月

福部村教育委員会
教育長　老門辰生

例　　言

1．本書は、福部村教育委員会が調査主体となり、1998（平成10）年度に国・県の補助を受けて試掘調査を実施した「村内遺跡発掘調査報告書」である。

2．発掘調査の対象となった村内遺跡は、鳥取県岩美郡福部村大字湯山（ゆやま）字小原（こはら）・白路ヶ山（しらじがやま）に所在する直浪（すくなみ）遺跡に隣接する地区である。

3．発掘調査の体制は下記のとおりである。　　敬称略

調査団長	老門辰生	福部村教育委員会教育長
調査委員	田村義朗	福部村文化財保護委員長
	河本康二	福部村文化財保護委員
	黒田一郎	福部村文化財保護委員
	小谷博文	福部村文化財保護委員
	森原増美	福部村文化財保護委員
	横山　利	福部村文化財保護委員
調査指導	鳥取県教育委員会	
調査主任	谷岡陽一	福部村教育委員会社会教育係長
作業員	安養寺久光　宇山光徳　河本康二　岸　守　黒田一郎	
	小谷博文　田村義朗	
整理作業員	井手野玉江　河原孝子　中原亮子	

4．本書に使用した挿図の座標・方位は磁北であり、標高は東京湾潮位を基準としている。

5．本書に掲載した挿図３の地形図は、「国土交通省鳥取工事事務所から提供を受けた駟馳山地区平面図1000分の１を縮小複製したものである。」

6．本書の執筆編集は、鳥取県教育委員会の指導のもとに谷岡陽一が行った。

7．出土遺物・図面・写真等の整理は、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとで調査員が行った。

8．出土遺物・実測図等は福部村教育委員会で保管している。

9．出土遺物には、〔例：ＳＮ 98-1T-3層（直浪遺跡－遺物番号）〕をネーミングしている。

10．発掘調査及び本報告書の刊行に際し、次の方々からご指導、ご援助をいただいた。銘記して感謝申し上げます。

中原　斉（鳥取県教育委員会事務局）　石谷　巌（土地所有者）
濱本 登芙枝（土地所有者）　濱本　肇（土地所有者）
濱本 はる子（土地所有者）

目　　次

序　　文
例　　言
本文目次・挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
　第1節　調査の経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
第Ⅱ章　直浪遺跡の位置と環境 …… 2
　第1節　直浪遺跡の位置と自然的環境 …… 2
　第2節　直浪遺跡の歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　直浪遺跡とその周辺 …… 6
第Ⅳ章　発掘調査の概要 …… 8
　第1節　発掘調査の概要 …… 8
　第2節　第1トレンチの調査 …… 8
　第3節　第2トレンチの調査 …… 8
　第4節　第3・第4・第5トレンチの調査 …… 8
第Ⅴ章　出土遺物 …… 16
第Ⅵ章　直浪遺跡発掘調査の成果 …… 19
報告書抄録 …… 21
図版

挿　図　目　次

挿図1．福部村位置図 …… 2
挿図2．福部村内遺跡分布図 …… 4
挿図3．調査トレンチ配置図 …… 6
挿図4．第1トレンチ土層断面図 …… 9
挿図5．第2トレンチ土層断面図 …… 10
挿図6．第3～5トレンチ土層断面図 …… 10
挿図7．古墳時代以降の土器（上師器） …… 11
挿図8．古墳時代以降の土器（須恵器） …… 12
挿図9．土錘 …… 12
挿図10．木製品 …… 14

挿　表　目　次

挿表1．直浪遺跡発掘調査歴 …… 7
挿表2．土器観察表 …… 13

図　版　目　次

図版1．調査地周辺の空中写真（北西から）
図版2．①調査地遠景（南から）
　②発掘調査作業風景
　③第1トレンチ穴掘状況（西から）
　④第2トレンチ完掘状況（北から）
図版3．①第2トレンチ土層堆積状況（東から）
　②第3トレンチ完掘状況（北西から）
　③第4トレンチ完掘状況（西から）
　④第5トレンチ完掘状況（北西から）
図版4．①古墳時代以降の土器（土師器）
　②古墳時代以降の土器（須恵器）
図版5．①古墳時代以降の土器（高坏底部）
　②土錘
　③木製品
　④木製品

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査の経緯

日本国土を網の目のように伸びる道路網は文化のバロメーターとも言われ、今や欠くことのできない車社会に密着したものとなっており、国・地方自治体では競って道路網の整備に取り組んでいる。そんなおり、国土交通省鳥取工事事務所では、山陰地方の動脈となっている「国道９号線」のバイパス工事を計画した。

同計画は、現在共用開始している国道９号線鳥取バイパスを更に延長して、本村の東端に位置する駟馳山をトンネルで貫通し、隣町の岩美町まで至る延長6.6kmの「駟馳山バイパス」となるものである。
国土交通省鳥取工事事務所は、この計画路線内に所在する埋蔵文化財の有無について、福部村教育委員会に協議依頼書を提出した。

同計画では、現在の国道９号線鳥取バイパスの終点となっている山湯山地区から水田部を横断し、国立公園でラッキョウ栽培が盛んに行われている砂丘地を縦断して駟馳山に至る計画となっている。

同計画路線内の埋蔵文化財は、周知の遺跡である「直浪遺跡」の東端部が未確定。更に直浪遺跡の隣地丘陵に所在する緑山古墳群が、樹園地内で表面的に確認できない他は、詳細な分布踏査によって埋蔵文化財の所在しないことが確認されてる。

協議の結果、福部村教育委員会が国・県の補助を受け、未確認となっている直浪遺跡の東端部及び緑山古墳群が所在する丘陵樹園地内の試掘調査を実施することになった。

第２節　調査の経過

平成10年６月９日に第１回村内遺跡発掘調査委員会を開催し、調査の方法、工程等について協議を行った。その結果、駟馳山バイパス建設予定地の範囲で、直浪遺跡の東端部と推定される畑地と竹林の２ヶ所に試掘トレンチを設定し、直浪遺跡の範囲と性格を確認する。更に東に隣接する丘陵部には、樹園地内に３ヶ所の試掘トレンチを設定し、遺跡の有無を確認することになり、調査は樹園地内で栽培が行われている梨の収穫が終了した後に実施することになった。

調査は、11月４日から30日間の予定で着手したが、比較的温暖で、天候に恵まれたことからほぼ予定どおりの進捗状況を見せ、12月７日で現地調査を完了し、翌年３月19日で室内整理作業を完了した。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と自然的環境

福部村は鳥取県の東部で、東経134度17分、北緯35度32分に位置している。北は日本海に面し、東は日本海に突出した独立峯のような駟馳山山頂から、南に延びる立岩山山系の分水界で岩美町に接している。西は国の天然記念物に指定されている鳥取砂丘から多鯰ケ池を経て摩尼山山系の分水界で鳥取市に接し、更に南東の稲葉山に至り、稜線を縦貫する村道宇倍野線を界して国府町に接している。

この東・西・南の三方を各山系に囲まれた内陸は、日本海沿岸に発達した砂丘が福部の湾口を閉ざし、沖積平野となって、東西約９km、南北約10km、総面積34.94Km²で、日本海に開けたＶ字形を呈する小盆地地形を形成している。

村内には、鳥取県の縄文遺跡を代表する「栗谷遺跡」・「直浪遺跡」をはじめ、15遺跡と200基を越える古墳群が周知の遺跡として確認されている。(註1) その大半は1976（昭和51）年に鳥取県教育委員会と福部村教育委員会によって行われた遺跡分布調査と1993～1995（平成５・６）年度の村教育委員会による「村内遺跡発掘調査事業」を契機に遺跡台帳が整備され、突発的な開発行為等によって発見される都度追加登録がなされている。

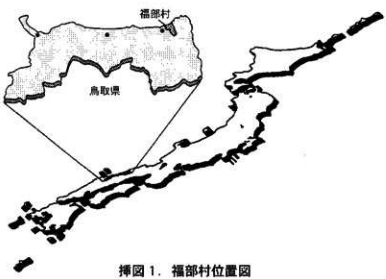
遺跡と密接な関係を持つ河川は、鳥取市、岩美町、国府町との境を接する「上野山」（標高390m）を主峰に分水界となって本流の塩見川を形成し、摩尼山山系の山麓を水源とする箭渓川、同じく摩尼山山系山麓の水源と湯山池周辺の湧水を水源とする江川の３河川が主要河川で２級河川に指定されている。この３河川は、前述の沢と呼ばれる細川田圃の湿田部で合流し、鳥取砂丘の東端を蛇行して駟馳山裾の河口へ注いでいる。

気候的には、比較的に温暖で過ごしやすいが、年間降水量は1970mm前後で、山陽方面と比較するとかなり多く、冬季には平野部で50cmを越す積雪を見ることがある。

直浪遺跡は、日本海沿岸の東西に細長く延びる国立公園鳥取砂丘に包括される福部砂丘の南端後背地の微高地に位置し、遺跡の中心部と推定されているこの付近は、緩斜面の微高地を削平して低段丘上に畑地を区画し、果樹と蔬菜が栽培されている。

遺跡の前面に当たる南方は、江戸時代から度々干拓が行われた水田域が広がり、対岸の摩尼山山系から幾重にも延びる丘陵先端部には、数多くの古墳が存在し、県東部の湖山池、県中部の東郷池のように、湖畔に突き出た丘陵上に多く古墳群が築造されている形態と共通点している。

直浪遺跡の南東対岸には、立岩山の麓に鳥取県指定の天然記念物「坂谷神社社叢」が広がっている。この緑一色



挿図１．福部村位置図

に染まった社叢林は、高木層にスダジイの巨木をはじめ、ヤマツバキ・カゴノキ、亜高木層にモチノキ・サカキ・シロダモ、低木層にゴンズイ・ヌルデ・コショウノキ、草本類にホシダ・オニヤブソテツ・イワタケソウ・クリハランなどが代表される植物で、南限・北限として知られる多種類の植物も混生し、県内でも例の少ない照葉樹林帯となっている。

小渓谷の坂谷神社社叢の南方約500mには、縄文時代後期を主体とする栗谷遺跡が所在し、近年の発掘調査では、多種多様な遺物が出土したことから注目されている。塩見川を介して対面する南方約200mの通称「藏の山」と呼ばれている丘陵尾根の先端部一帯は、本村で最も密度の高い約60基の古墳が展開し、「箭渓古墳群」の中核を形成している。

この塩見川上流約2kmには、南限の植物とされているクリハランなどの貴重な植物の宝庫として保護されている標高約80mの「南田神社」の社叢が小さな独立峯のような風情を見せている。

この福部の地に、人の生活が営まれ始めたと推定される縄文時代前期は、いわゆる縄文海進によって現在の平野部の大半が日本海に没する入り海若しくは、島根県の宍道湖のように海水と淡水が交じり合う汽水湖であったと考えられている。人々はこの福部の地一帯をテリトリーとして、狩猟、採集、魚撈を糧とする生活を送っていたものと考えられ、安定して食糧を供給できる永住しやすい地域であったものと推定される。しかし、直浪遺跡と栗谷遺跡が対岸とは言え、近接しながら双方の遺跡ともに縄文時代・弥生時代・古墳時代と永期にわたり、同じ場所での生活が営まれていることは、この外海に通ずる入り江を拠点とした舟による海上交易も大きな要因を占めていたものと思われる。

註1　福部村教育委員会『福部村内遺跡発掘調査報告書』1995
註2　福部村『福部村誌』1941

第2節　直浪遺跡の歴史的環境

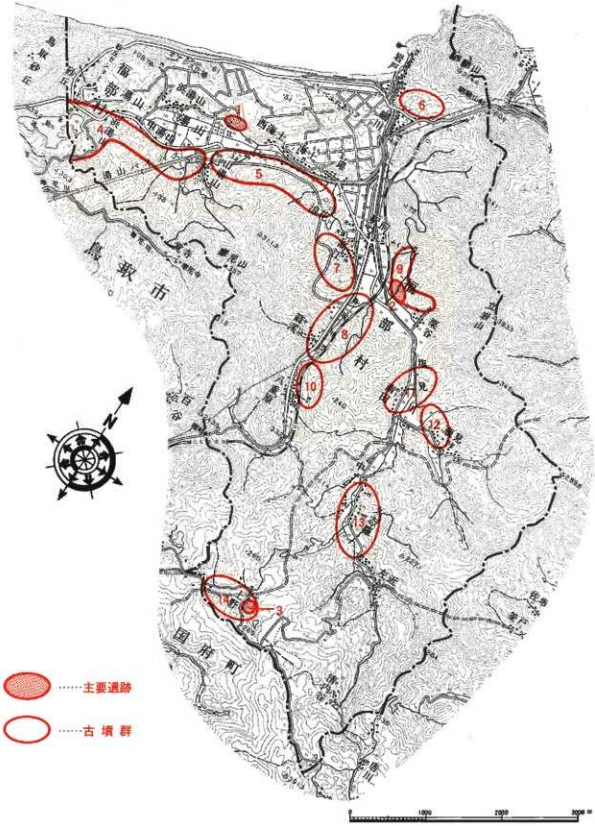
福部村内では、旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていないが、鳥取県東部に分布する縄文時代の遺跡では、早期の押型文土器が出土している鹿野町の柄杓目遺跡が早期の遺跡で、栗谷遺跡等が次に続く前期の遺跡として確認されている。栗谷遺跡の発掘調査では、ドングリ・クルミ、トチの実などを貯蔵した37基の貯蔵穴群と上器・石器の他、木器・網代編みの籠・もじり編み技法による網などが低湿地遺跡特有の良好な遺存状態で検出されている。これら多種多様の出土遺物は、縄文時代の生活様式を知ることのできる貴重な資料として平成6年に61点が「重要文化財」に指定されている。

近隣では、福部砂丘に境を接する鳥取市の浜坂砂丘地の中で「浜坂遺後遺跡」・「長者ケ庭遺跡」・「栃木山遺跡」が縄文時代の遺物散布地として知られている。この他湖山池の南岸に所在する「布勢遺跡」では、土器・石器・木器などが多量に検出され、南岸に所在する「桂見遺跡」では、平成5年の発掘調査で縄文時代後期の丸木舟が出土しているが、現存するものとしては国内最大級のものである。

現在までに因幡地方で発見されている縄文時代の主要遺跡は、湖岸のような水辺に近い場所を拠点として分布している。

弥生時代になると稲作が普及し、種々の石器の他に金属器の使用が始まり、隣接する岩美町新井の丘陵部では流水文銅鐸が出土し、浜坂砂丘や湖山砂丘では、銅鏃・鉄鏃が発見されている。

縄文時代に人々が定住した栗谷・直浪の両遺跡でも弥生時代の人々が継続して生活していたことが土器・石器などから明らかとなっており、塩見川の源流である上野山台地（標高250m）では、畑地の開墾時に弥



挿図2．福部村内遺跡分布図

1．直浪遺跡　2．栗谷遺跡　3．上野遺跡　4．湯山古墳群　5．海土古墳群
6．細川古墳群　7．高江古墳群　8．箭渓古墳群　9．栗谷古墳群　10．八重原古墳群
11．南田古墳群　12．蔵見古墳群　13．久志羅古墳群　14．上野山古墳群

生時代中期の土器・扁平片刃石斧などが採取されて「上野遺跡」（4）の存在が確認されている。

上野遺跡はその立地条件から、粟谷遺跡、直浪遺跡とは異なった高地性集落遺跡としての関連も注目すべきであろう。

この後古墳時代へ移行すると、共同体の高い地位にあった人の死にあたって、壮大な高塚を築き、多くの副葬品と共に手厚く埋葬する風習が広まる。ここ因幡地方にも畿内的な様相をおびた大型の古墳が築造されている。村内でも古くから数多く古墳が確認されており、約200基を越える古墳が11群にまとめられて展開している。墳丘の形態は前方後円墳・方墳・円墳・横穴と多種に渡るが、その大半はラグーンを見下ろす丘陵の尾根に分布しており、後期古墳に見られる横穴式石室は、平野部から山間部に分布する特徴を示している。

村内における古墳の発掘調査は、その大半が開発行為に伴う調査であり、「湯山６号墳」では小札（こざね）を桧（ひのき）の葉状にカットした特異な「小札鋲留眉庇付冑」と「三角板革綴短甲」、「鉄刀」、「鉄鏃」等の武具がセットで副葬されていた。[註2] また「蔵見３号墳」では、全国的に類例の少ない変形八角形の平面プランを持つ墳丘と、因幡地方に多く分布する中高式天井石室型式の横穴式石室内で、類例の無い鵜尾付陶棺が出土している。

遺跡の発掘調査例では、直浪遺跡の丘陵台地で採砂作業中の工事関係者によって「柱穴群」が発見され、発掘調査の結果、５世紀から６世紀に渡り継続的に居住したと推定される竪穴式住居跡（１棟）・掘立柱状建築遺構（３棟）を検出している。[註3] 尚、この遺構は、調査終了後埋戻されて現在も保存されている。

古代に律令制が確立された時期には、福部村一帯は、因幡国法美郡服部郷に属しており、海士と八重原には、式内社があった。隣町の岩美町では国の史跡指定となっている白鳳期の岩井廃寺塔跡も遺存し、上野山を越した国府町中郷には因幡の国府が置かれていた。以後この国府町一帯が政治・経済・文化が交流する中心地として繁栄して行き、奈良時代の官立寺院である金光明四天王護国之寺（国分僧寺）、法華滅罪之寺（国分尼寺）が建立されている。

本村には、この時代を特徴付ける出土品は極めて少いが、箭渓の墓地で墓穴を掘り下げ中に土師質の「経筒」が出土している。この経筒は、上部がやや広がった高さ24cmの円筒形を呈し、蓋の中心部はキューピー人形の頭のような特徴ある突起状のつまみを有しており、鳥取県立博物館に展示保管されている。[註4]

註１．福部村教育委員会『粟谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1989・1990
註２．福部村教育委員会『湯山６号墳発掘調査報告書』1978
註３．福部村教育委員会『直浪遺跡発掘調査報告書』1976
註４．鳥取県埋蔵文化財センター『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ４．1989

第Ⅲ章　直浪遺跡とその周辺

直浪遺跡は、鳥取砂丘の後背地で標高７・８ｍ程度の微高地に立地し、遺跡の南面はラグーンの名残である湯山池が広がっている。北面は前述の砂丘が押し寄せて急斜面を形成し、遺跡の中程は狭い谷地形が形成され、砂丘地に浸透した雨水が湧水となって湯山池へと注いでいる。

遺跡の発見は、昭和21年の湯山池の干拓工事に際し、埋土として砂丘の採砂工事が行われ、多量の土器・石器が発見されたことから遺跡の存在が明らかになっている。

現代の文明社会では、居住地に不適な立地条件を克服することは容易いものの、原始、古代においては衣食住の要件を兼ね備えることが絶対条件であり、発見の当時は、この地がかっては不毛の地と云われ、砂丘の砂に深く覆われた下層に遺跡の所在する事など想像されなかったことであろう。

この発見を契機に砂丘遺跡の研究と重要性が認識され、昭和30年に「福部村教育委員会による遺跡の保存研究調査」が行われ、昭和42年に「帝塚山大学考古学研究室による発掘調査」が行われている。更に、昭和51年に過去の調査区より約100m西の段丘状地形の上で、採砂中に古墳時代後期の柱穴群が発見され、「福部村教育委員会による緊急発掘調査」、昭和56年には「文化庁による遺跡保存方法の検討調査」が行われている。

最近の調査では、福部村教育委員会が直浪遺跡の性格とその範囲を求めることを主目的に、国、県の補助を受けて試掘調査を実施し、出土遺物の状況から遺跡の南端、西端を確認している。

この５次に渡る発掘調査では、縄文時代中期を主体とする土器、石器、弥生時代の土器、石器、古墳時代以降の土器、石器のが多量に出土している。しかし、縄文時代、弥生時代の出土遺物に代表される遺物包含層を確認しているものの、人の営みを直接的に結び付ける遺構等が検出されていないことから、遺跡の核となる住居跡等は、北の砂丘下に所在する可能性も報告されている。

発掘調査	調査年度	調査目的	調査主体	発掘調査報告書等
第１次調査	昭和30年	遺跡の保存研究調査	福部村教育委員会	直浪遺跡発掘調査報告(予報) 1956
第２次調査	昭和42年	学術調査	帝塚山大学	
第３次調査	昭和51年	柱穴群の緊急調査	福部村教育委員会	直浪遺跡発掘調査報告書1976
第４次調査	昭和56年	遺跡保存方法の検討調査	文化庁	遺跡保存方法の検討 -砂地遺跡-1981
第５次調査	平成５年	福部村内遺跡発掘調査	福部村教育委員会	福部村内遺跡発掘調査報告書1995

挿表１．直浪遺跡発掘調査歴

《参考文献》

福部村教育委員会『直浪遺跡発掘調査報告書』(予報)　1956
福部村教育委員会『直浪遺跡発掘調査報告書』　1976
文化庁『遺跡保存方法の検討』－砂地遺跡－　1983
福部村『新編福部村誌』－原始－　2000

挿図3．調査トレンチ配置図

第Ⅳ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の概要

第５次にわたる直浪遺跡の発掘調査では、それぞれ目的は異なるものの、遺跡の性格とその範囲を特定する多くの資料を提供している。しかし、遺跡の所在が国立公園内に包含されていることと、厚い砂丘下に所在する遺跡であることから、掘削を伴う工事等が行われない限り遺跡の所在を確認することはできない等の課題も含んでいる。また、直浪遺跡の東丘陵の白路ヶ山（通称：「縁ノ山（えんのやま）」）一帯は、梨の樹園地として耕作されており、昭和30年に肥料穴を掘り下げていたところ３基の石棺が発見され、調査の後再び埋め戻して縁ノ山古墳群として登録されいる。しかし、現況は樹園地の中であるため、著しい削平を受けていることから、墳丘の痕跡を認めることは不可能で、地表面の観察では古墳の所在を推定することはできない。

今回の調査は、国道９号線バイパス工事に先行しての試掘調査で、国道９号線鳥取バイパス終点の山湯山集落前から前述の旧湯山池を横断し、砂丘畑を縦貫して東の駟馳山をトンネルで貫通する計画である。

このような場合、施工計画路線の全線を対象に遺跡の有無を確認することが必要となるが、厚く堆積した砂丘地で試掘を実施することは、膨大な費用と労力を要する。したがって、地権者の承諾を得ることができ、周知の遺跡の隣接地で施工計画路線内に試掘トレンチを設定し、遺跡の有無、更に遺跡が確認された場合は、その範囲と性格を垂直的に求めることを目的に調査を行った。

第２節　第１トレンチの調査

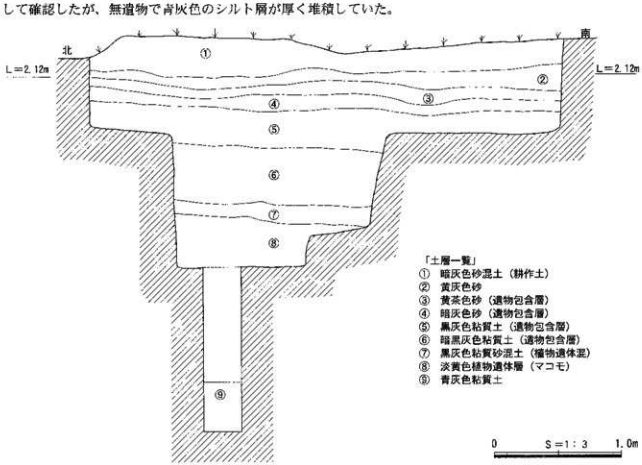
第１トレンチは、村道浜湯山・県線の沿線で従来の概念から直浪遺跡の中心地と推定されている地区から東へ約70mの地区で、北の砂丘地裾に生い茂る竹林の谷地形から流れる小水路が村道と交差する畑地に３m×４mの南北トレンチを設定した。この地区は耕作土地表面に細片となった遺物の散布が認められる地区で、第５次調査の第３トレンチを設定した旧樹園地に接している。第５次調査の第３トレンチは、前述の小水路を介して西の約１m程度小高く、今調査のトレンチから10mの近接地で、２次堆積の層中から縄文時代中期から中世に至る遺物が検出されている。

今調査は、地表下 180cmまで掘り下げ、更にその下層は特にハンドオーガーを入れて層序を確認した。

土層の基本的な層序は、上から第１層暗灰色砂混土、第２層黄灰色砂、第３層黄茶色砂、第４層暗灰色砂、第５層黒灰色粘質土、第６層暗灰色粘質土、第７層黒灰色粘質砂混土、第８層淡黄色植物遺体層、第９層は、青灰色粘質土である。

第１層は、層厚20cm～30cmの耕作土で、層中には細片となった土師器、須恵器が認められる。第２層は、層厚10cm～20cmの新砂丘が堆積した無遺物層である。第３層は、層厚５cm～10cmで土師器、須恵器の細片をわずかに含む遺物包含層である。第４層は、層厚約10cmの遺物包含層で、磨耗の著しい土師器、須恵器片を包含している。第５層は、層厚約30cmで土師器、須恵器の細片をわずかに含む遺物包含層である。第６層は、層厚約45cmの遺物包含層で、土師器片、須恵器片、加工痕の残る木片、軽石、植物遺体等を包含している。第７層は、層厚10cm～15cmの植物遺体を含んだ無遺物層である。第８層は、約40cmまでトレンチを掘り下げたところで、トレンチ壁面が崩落する可能性生じたために、以下の下層をハンドオーガーで確認した。その

結果、層厚約 130cmのマコモが厚く堆積した無遺物層である。第９層は、ハンドオーガーを約40cmまで降ろして確認したが、無遺物で青灰色のシルト層が厚く堆積していた。



挿図４．第１トレンチ土層断面図（東壁面）

第３節　第２トレンチの調査

第２トレンチは、砂丘裾で第１トレンチの北約40mに位置する孟宗竹林内に3.5m×2.5mの東西トレンチを設定した。

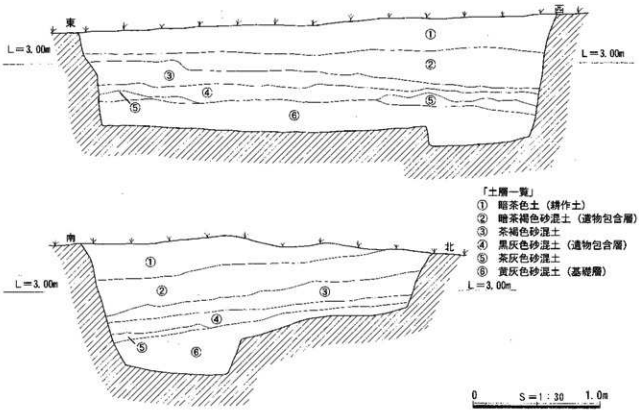
土層の基本的な層序は、上から第１層暗茶色土、第２層暗茶褐色砂混土、第３層暗茶褐色砂混土、第４層黒灰茶色砂混土、第５層茶灰色砂混土、第６層黄灰色砂・ブロック混土である。

第１層は、層厚約20cmの孟宗竹林表土で無遺物層である。第２層は、層厚５cm～30mの砂を含んだ層で、土師器片、鉄片が検出された。第３層は、層厚３cm～15mの砂を含んだ無遺物層である。第４層は、層厚３cm～12cmの火山灰層で、須恵器片と磨石と推定される残欠片が検出された。第５層は、層厚約７cmの無遺物層である。第６層は褐鉄鉱の貫入が見られる基盤層である。

第４節　第３・第４・第５トレンチの調査

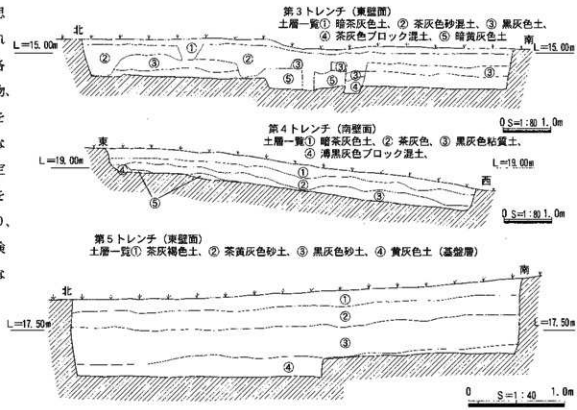
第３・第４・第５トレンチは、直浪遺跡の中心地と推定されている地区から東へ約150m～200mに位置する白路ヶ山の丘陵地に設定した。トレンチの設定は、樹園地の地権者から承諾の得られた制約下での選地であり、古墳の所在を確認するトレンチの設定として満足の行くものではない。

トレンチの位置、丘陵の西斜面に９m×１mの第３トレンチ（南北）、８m×２mの第４トレンチ（東西）、丘陵の東斜面に4.5m×1.5mの第５トレンチ（南北）を設定して掘り下げた。この３地区のトレンチは地表



挿図５．第２トレンチ土層断面図（上：南壁面・下：西壁面）

から約80cm程度で基盤層に達し、層序は、第１層が茶褐色土の耕作土、第２層が砂を含んだ茶褐色土、第３層が砂と火山灰を含んだ黒灰色土、第４層が黄灰色土の基盤層で、第３トレンチで数カ所の落ち込み状を呈する層位の乱れがみられたが、底面から肥料袋の断片が検出されたことから、果樹園の施肥のために掘られたものと思われ、これを除くと各層共に遺物、自然石等を全く含まないほぼ安定した堆積を示しており、遺構等の検出はできなかった。



挿図６．第３～第５トレンチ土層断面図

第V章　出　土　遺　物

第1節　出土遺物

直浪遺跡の発掘調査では、第3次の柱穴群緊急調査を除き、昭和30年の第1次調査から平成6年の第5次調査で縄文時代、弥生時代、古墳時代以降の遺物が検出されている。

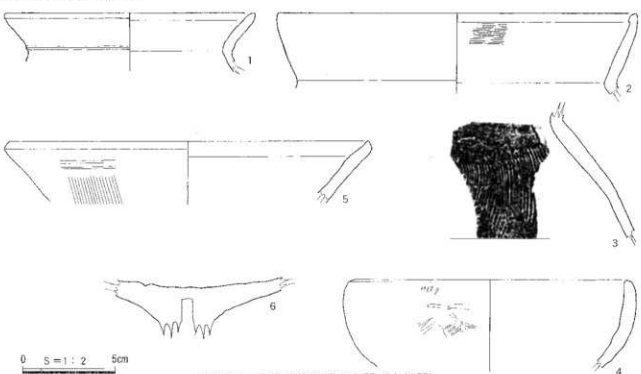
今回の調査地区は、第5次調査の第3トレンチから約10m東寄りに第1トレンチを設定しての調査であり、遺物の量、器種共に少なく縄文時代、弥生時代の遺物と特定されるものは検出されなかった。

出土している遺物の大半は、第1トレンチから出土したもので、第3層から第6層で検出されたものであるが、各層共に古墳時代以降の遺物が混在し、2次堆積の様相を呈する層中からの出土遺物である。また、検出された遺物は細片となっている土器も多く、本報告ではその部位と器形が特定できる各遺物について外観し、報告の責を果たすこととする。

【古墳時代以降の土器・土製品】

1．土師器・土師質土器（挿図7、図版4）

（1～2）は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、（1）は口唇部を丸くおさめる単純な口縁を持つ甕形土器で、（2）は口唇部内面を肥厚させる口縁を持つ甕形土器で、いわゆる布留式系の甕である。（3）は屈曲して球形を呈する甕形土器の肩部から胴部である。（4）は内外面共に赤褐色塗彩を施す軟質の鉢形土器である。（5）は口唇部がやや肥厚する高坏形土器の口縁部で、内外面共に赤色塗彩を施している。（6）は高坏形土器の底部で、坏部と極端に肥厚した脚基部で欠損している。脚部と坏部の接合は坏部に脚部を挿入しており、接合部に小円孔が残る。調整は内外面共に丁寧なナデ調整の後、赤色塗彩を施している。



挿図7．古墳時代以降の土器（土師器）

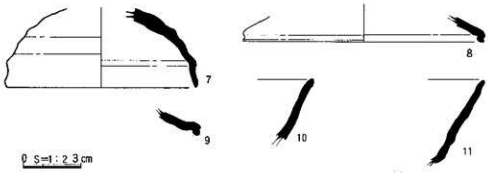
2．須恵器（挿図８、図版４）

坏　蓋

（７）は復元口径10cmの坏蓋で、今回の調査の須恵器中で最も古相を示すものである。口縁と体部の境は稜で区画されている。

蓋

蓋（８・９）は内面のかえりが消失して端部を折り返す蓋の端部である。両蓋共に擬宝珠系若しくは、輪状系のつまみが付く蓋であると思われる。



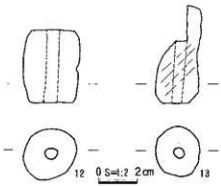
挿図８．古墳時代以降の土器（須恵器）

坏

坏身（10・11）は、両坏身共にその器形から高台の貼り付く坏身と思われるが、底部は欠損しており坏身全体の形態等を特定することはできない。

3．土錘（挿図９、図版５）

土錘（12・13）は２個出土し、いずれも第１トレンチの第６層から出土したものである。（12）は胴部がビヤ樽のようにやや膨れる円筒形を呈し、（13）は端部から胴部にかけて一部欠損しているが、両端部をつまんで右捻りしている捻れ痕が残り、捻られたことで胴部が鼓のように細る円筒形を呈している。これらの土錘は、当遺跡が水辺に立地していることから、漁撈の錘として用いられた可能性が高く、古墳時代以降の遺物であると推定されるが、近年まで同様の形態で漁撈に用いられていたことから、その形態のみでは時代の特定は不可能である。



挿図９．土錘

【木製品】

1．木製品（挿図10、図版５）

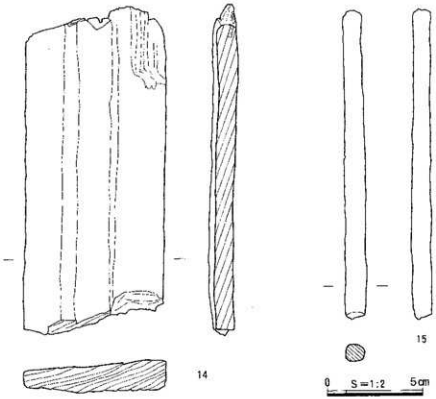
木製品は、第１トレンチの第６層の遺物包含層から出土したもので、湖岸等に見られる漂着物と同様の多くの木屑に混じって加工痕跡が見られる２点の木製品が検出された。

（14）は、板状木製品で双方の端部に折れた痕跡が残り、欠損した板材と思われる。残存長17.5cm、幅7.5cm、厚さ1.6cmの板材で、長い板材の断片であると推定され、面的にはカンナをかけたような仕上げ面は見られない。（15）は、長さ16.5cm直径1.0cmの細い棒状木製品で、丁寧に研磨されているが、一方の端部に折れた痕跡が見られることから加工時は更に長い木製品であったと推定される。何れも用途は不明である。

①口径 ②器高 ③最大径 ④底部径 ⑤脚部径 ⑥長さ ⑦幅 ⑧孔径 ※復元値 △残存値

遺物番号 埴輪番号 図版番号	注記番号	出土層位	器種	法量 (cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SN98-1T-4	4層	土師器 甕	※①13.8	口縁がやや外反する。口縁、頸部外面に煤付着。	口縁内外面共にヨコナデ。	石英と微粒の雲母を含む	良好	暗茶褐色	
2	SN98-1T-6	6層	土師器 甕	※①19.7	口唇部内面が肥厚する。	口縁部外面ナデ。口縁部内面ヨコナデ後刷毛目調整を施す。	微砂粒に雲母を含む	良好	明灰色	
3	SN98-1T-6	6層	土師器 甕		器壁が厚くやや長脚化。体部に煤付着。	肩部外面ヨコナデ後肩部下を刷毛目調整を施す。内面一部にユビオサエする。	石英と微粒の雲母を含む	良好	淡灰色	
4	SN98-1T-6	6層	土師器 鉢	※①15.5 ※③16.0	体部が著しく肥厚する。	内外面共にヨコナデ後口縁部外面に刷毛目調整を施す。内外面共に赤色塗彩。	緻密	やや軟	赤褐色	
5	SN98-1T-6	6層	土師器 高坏	※①19.7 ※③20.0	直線的に上外方へ伸びる。口唇部内面が肥厚する。	外面坏部に刷毛目調整の後口縁部をヨコナデ。内面ナデ、内外面共に赤色塗彩。	緻密	良好	黄赤色	
6	SN98-1T-6	6層	土師器 高坏		平らな坏底面。	内外面共にヨコナデ後赤色塗彩。脚部と坏部の接合部に坏部を挿入した小円孔が残る。	緻密	良好	黄赤色	
7	SN98-1T-6	6層	須恵器 坏蓋	※①10.0	天井部に丸味を持ち、口縁部はなだらかに内湾気味で端部にいたり、端部は丸い。	外面天井部ヘラ切り後ナデ、口縁部回転ナデ。内面天井部口縁部共に回転ナデ。	微砂を含む	良好	暗灰色～青灰色	
8	SN98-1T-4	4層	須恵器 蓋	※①12.8	返りは消失し、口縁端部を折り返す。	内面不正方向ナデ。	緻密	良好	灰白色	
9	SN98-1T-4	4層	須恵器 蓋		返りは消失し、口縁端部を折り返す。	内面不正方向ナデ。	微砂を含む	良好	灰色	
10	SN98-1T-6	6層	須恵器 坏		口縁がやや外反する。	内外面共にヨコナデ。	微砂を含む	良好	明灰色	
11	SN98-1T-6	6層	須恵器 坏		体部は直線的で、やや直立気味に立ち上がる。	内外面共にヨコナデ。	微砂を含む	良好	暗灰色	
12	SN98-1T-6	6層	土錘	⑥ 3.9 ⑦ 3.0 ⑧ 0.7	円筒形	平手モミの後端部をユビオサエ。	石英と微粒の雲母を含む	やや軟	灰褐色	
13	SN98-1T-6	6層	土錘	⑤ 5.2 ⑦ 2.3 ⑧ 0.5	円筒形	平手モミの後端部をユビオサエ。双端部をつまんで左捻り。	石英と微粒の雲母を含む	やや軟	灰褐色	

挿表2．土器観察表



挿図10. 木 製 品

第VI章　村内遺跡発掘調査の成果

試掘調査

今回の発掘調査は、国道９号線膳所山バイパス建設予定ルートの試掘調査であることから、調査範囲の限定さたものであった。直浪遺跡は、古くから縄文時代の重要遺跡として注目されながら、その範囲を特定する調査は少なく、調査の大半は遺跡の中心部と推定される地区に集中している。したがって、遺跡の範囲を特定する調査は、福部村教育委員会が実施した第５次調査で、この調査では遺跡の東端部が未確認となっている。したがって今調査は未確認部分を追求する好機であり、５次調査の東端試掘トレンチから東に５カ所の試掘トレンチを一定間隔で設定した。

調査の結果、人が生活していたことを直接示す遺構の検出はできなかったが、村道と隣接する畑地に設定した第１トレンチの２次堆積と推定される層中から古墳時代以降の土器、木製品等が検出された。しかし、当トレンチから約10m西に位置する第５次調査の試掘トレンチでは、２次堆積と推定される層中から十数点の縄文時代の土器片が検出されていることから、今回の第１トレンチ付近が縄文時代の遺物包含層の東端部と推定される。また、第１トレンチの第８層から厚いマコモ層が検出されたことから、当地区は湖沼の湖岸と推定され、上層で検出された遺物は丘陵方向からの流出遺物である可能性が高い。

第２トレンチは、砂丘丘陵裾部に設定したが、畑地への開墾と推定される削平を受けており、須恵器の小片が検出されたのみであった。

第３～第５トレンチは、東丘陵の樹園地内に設定し、直浪遺跡、周知の縁山古墳を形成する一群を検出する目的で設定したが、遺構、遺物等は全く検出されなかった。しかし、このトレンチは梨木の双樹で掘削可能な位置に限定したもので、古墳の築造例等から最も多く築造されている可能性の高い丘陵頂部で確認調査ができなかったことは、問題を先送りする結果となった。

出土遺物

出土遺物は、第２トレンチで検出された１点の須恵器片を除いて、全て第１トレンチの第３層～第６層で検出されたもので、木製品、木屑類の漂着物と推定されるものが混在し、土器も新旧混在して出土していることから明らかに２次堆積の層中から出土したものである。

したがって、木製品に年代を位置づけることはできなかったが、出土土器を考察すると、最も古く位置づけらものは、古墳時代中期と考えられるもので、最も新しく位置づけられるものは、９世紀まで降るものと考えられ、かなりの時期幅をもって出土している。この遺物包含層は、第１調査・第５次調査でも報告されており、類似の包含層が直浪遺跡に広範囲に広がっているものと思われる。

まとめ

今回の発掘調査では、直浪遺跡の縄文時代遺物包含層の東端部を確認できたことは大きな成果であり、縄文時代の遺物包含層は過去の調査成果と合わせて北の砂丘下を除き全て把握できたことになる。しかし、東丘陵に所在する縁山古墳の位置と遺構の確認ができなかったことは、間近に迫った国道９号バイパス建設工事に課題を残し、工事着手前に再度の試掘調査を行うことを願いまとめとする。

報　告　書　抄　録

ふりがな	そんないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	村内遺跡発掘調査報告書
副書名	直浪遺跡
巻次	
シリーズ名	福部村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１４集
編者名	谷岡陽一
編集機関	福部村教育委員会
所在地	〒６８９－０１０２　鳥取県岩美郡福部村大字細川６６８
発行年月日	西暦２００１年３月２０日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
湯山所在遺跡（直浪遺跡）	鳥取県岩美郡福部村大字湯山字小原・白路ヶ山	31033	104	35度32分48秒	134度15分43秒	19981104～19981207	53	国道９号線顕施山バイパス（試掘）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湯山所在遺跡（直浪遺跡）	集落跡	古墳時代～中世		土師器 須恵器 木製品（用途不明）	

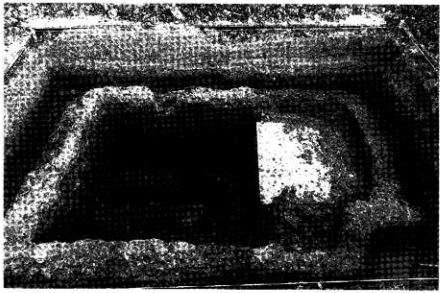
図　版　編

図版 1

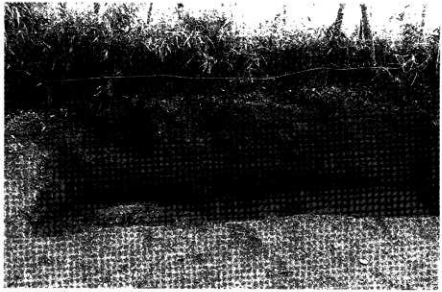
調査地周辺の空中写真（北西から）

① 調査地遠景（南から）

② 発掘調査作業風景



③ 第１トレンチ完掘状況（西から）



④ 第２トレンチ完掘状況（北から）

図版２

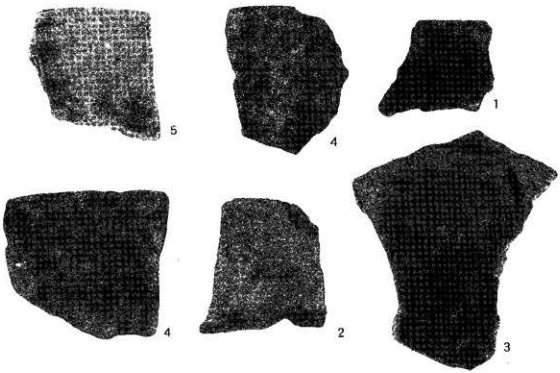
① 第2トレンチ土層堆積状況（東から）

② 第3トレンチ完掘状況（北西から）

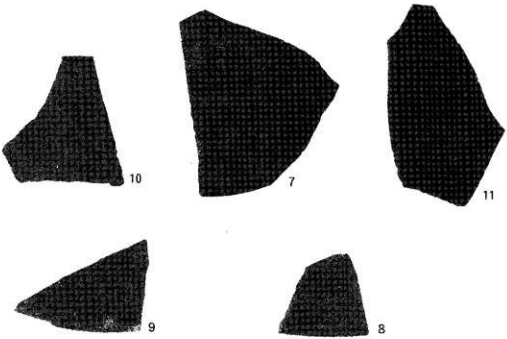
③ 第4トレンチ完掘状況（西から）

④ 第5トレンチ完掘状況（北西から）

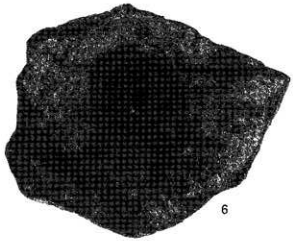
図版3



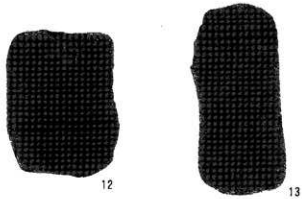
① 古墳時代以降の土器（土師器）



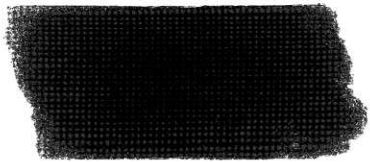
② 古墳時代以降の土器（須恵器）



① 古墳時代以降の土器（高坏底部）



② 土　錘



③ 木製品

④ 木製品

図版5

福部村埋蔵文化財調査報告書　第14集
村内遺跡発掘調査報告書（直浪遺跡）

平成13(2001)年3月発行

編集　福部村教育委員会
発行　〒689-0102 鳥取県岩美郡福部村細川658
TEL (0857) 75－2816

印刷　綜合印刷出版株式会社
〒680-0022 鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23－0031